

Title	中岡省治名誉教授に聞く : 大阪外国語大学の思い出 (2)
Author(s)	進藤, 修一; 菅, 真城
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 4 P.167-P.188
Issue Date	2010-09-07
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/8720">http://hdl.handle.net/11094/8720</a>
DOI	
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## 中岡省治名誉教授に聞く —大阪外国語大学の思い出—(2)

進藤 修一・菅 真城\*

SHINDO Shuichi and KAN Masaki

### Emeritus Professor NAKAOKA Shoji and His Memories of Osaka University of Foreign Studies (2)

Keywords : Osaka University of Foreign Studies, the transfer of a campus, the academic reforms, an experience of foreign countries

キーワード : 大阪外国語大学, キャンパス移転, 大学改革, 海外経験

#### 解説

本稿は、進藤修一・菅真城「中岡省治名誉教授に聞く—大阪外国語大学の思い出—(1)」(『大阪大学世界言語研究センター論集』第3号、2010年)に続く、中岡省治大阪外国語大学名誉教授へのインタビュー録の後半である。このインタビューは、2009年11月5日に大阪大学外国語学部学術交流室で実施した。インタビュアーは、進藤修一大阪大学大学院言語文化研究科准教授が務め、菅真城大阪大学文書館設置準備室講師が同席した。

本インタビューでは、まず、大阪外国語大学史上の大きな出来事として、大阪市内の上本町8丁目から、箕面市へのキャンパス移転について語られる。箕面への移転は、特に第二部(夜間)生の通学が大きな問題であったことが分かる。

次いで、大学改革についての話に移る。中岡名誉教授は大学改革案作成にあたって中核的役割を果たした将来計画委員会等の委員ではないが、改革の当事者の証言も交えて、改革の具体像を語る。この改革で、中岡名誉教授の所属したイスパニア語学科は、ヨーロッパⅢ講座南欧地域文化専攻スペイン語とアメリカ講座中南米専攻スペイン語に2分される。そしてまた、イスパニア語の名称もスペイン語に変更される。

そして、大阪外国語大学の特徴でもある海外調査研究に話は移る。まずは、中岡名誉教授が初めて実際にスペイン語圏に行ったメキシコ調査団について語る。この調査団は、イスパニア語学科の学生が企画したものであり、当時の学生の行動力がよく分かる。また、調査団の行き先では、すでにイスパニア語学科の卒業生が活躍していたことも興味深い。次いで、ローマ教皇立カトリック大学東洋研究センターで講義した際の経験を語る。フジ

\* 大阪大学大学院言語文化研究科・准教授／大阪大学文書館設置準備室・講師

モリ氏が大統領になっていく過程のペルー国内情勢も知ることができる。

その他、中岡名誉教授の印象に残っている事柄として、外国人教員に定年規程が導入されたことと、イスパニア語学科の語学科誌について語ったのち、今後のスペイン語学科の学生諸君へのメッセージでインタビューを締めくくっている。

2009年11月5日

於 大阪大学外国語学部学術交流室  
(大阪府箕面市)

### 大学移転

**進藤** それでは中岡先生のインタビュー、本日は第2回です。前回は、ちょうど歴史的にも大きな節目となりました学生運動までのお話をお伺いしましたが、旧外大にとってもう一つの大きな節目というのは、やはり大阪市内から箕面市への移転だったと思います。その時代を実際に経験された先生からしか伺えないお話などいろいろおありでしょうから、まず大学移転からインタビューの続きを再開させていただきたいと思います。

**中岡** それでは始めさせていただきます。

大学移転という大きなテーマですが、昭和40年代後半には大学紛争も徐々に沈静化しまして、授業もなんとか正常化されていったと思います。しかし、それでも教室では、学生と教師との間にわだかまりのようなぎこちない雰囲気が残っておりました。

この大学紛争時の歪みの修正と、それに続く大学移転の大事業を一身に背負われたのが牧祥三学長でした。牧先生は昭和47年3月から昭和52年2月までを在任期間とされています。ただし、それよりも前の3年間ほど、大学紛争の後遺症としての不正常的事態とか、混乱の時期を、学長代行としていろいろご苦労なさったと思います。

それである日、緊急に教授会が招集されまして、牧学長の前任の金子二郎学長から、大学が予定していた万博跡地への移転が不可能になったことが報告され、こうした結果を招いた責任者として学長を辞任したい旨の申し出が、教授会に対してありました。万博跡地への大学移転は決定的であると、われわれは皆決めていたと思うんです。ですから、そのお話を聞いて啞然としたことを覚えていますね。

このような事態を前にして、それを受けられて牧先生は最初の計画にしたがい、大学の万博跡地への移転を実現するために、ときの自民党幹事長の田中角栄氏に陳情にまで出向かれていますということなんです。このことはご自身でも教授会でお話になっていたと思います。

万博跡地への移転はなりませんでしたが、あるとき、牧先生のもとで直接に移転の仕事を担当されていた職員の方から、当時の苦労話を伺うことができました。これは、たしか入学試験のとき、ちょっとの休憩時だったと思うのですが、なかでも牧先生の移転にかけられる熱意と誠実なお人柄に打たれて、関係職員が献身的に仕事をされたと、皆さんの頑張りのありさまを語っておられたのが、いまでも強く印象に残っております。ご苦労され

ている職員の方々に、牧先生から何度も温かいねぎらいの言葉があったとか、こうした思い出を感激して語っておられましたね。ですから、このような関係者のご努力があって、昭和54年9月に箕面キャンパスへの移転が成ったのだと思います。

同時にまた、移転に関しては第二部の教育と通学が大きな問題になったということです。この点については、当時、二部主事を務められていた、後の学長の山田善郎先生が二部自治会との交渉に当たられていて、「今日もまた団交に行くんだ」とおっしゃっていたことも、私はよく覚えております。

なお、山田先生は二部主事としては昭和51年4月から53年3月までの任期を努めておられます。大学は昭和54年9月に箕面キャンパスに移転をしておりますから、その前のいろいろな移転に伴う問題の処理に、特に二部問題の処理に当たられていたと思うんです。

これらの問題についても、改めて先生にお伺いしました。そのお話に基づいて少し申し上げますと、大学移転で抜き差しがたいほどの大きな障害になったのは、第二部の教育と通学の問題でした。二部の学生自治会と当時の山田二部主事と松村事務長は、連日連夜、授業が終わった9時過ぎから団交を深夜まで果てしなく続けられたようです。その間、第二部事務室の職員は誰一人帰宅することもできず居残っていたとのことでした。

当初、千里中央もしくは北千里からのバスは粟生団地までしか行かず、あとは大学移転予定地までは20分から30分の徒歩を余儀なくされていました。事務関係の方など、用事でこちらへ来られるときも、バスを利用した場合には、粟生団地からこちらまで歩いて来られていたようですね。

これでは、二部の学生は、それぞれの勤務地からどうして6時の始業時までに大学へたどり着くことができるのか、また仮に始業時を繰り下げた場合に、すでに深夜に近くなる終業時に、特に女子学生にバスターミナルまで20分、30分も暗闇のなかを歩かせるのかとか、もし万が一事故があった場合に大学は責任がとれるのかなど、要するに第二部学生に就学を断念せよというのか、というまさしく詰問的な自治会からの問題提起であり、結局は第二部はあくまで上本町の地にとどまるべきである、というのが第二部自治会の主張であったということでした。

しかし移転に関しては、すでに教授会で決議されていて、しかも現状移転が文部省から課せられた条件であったので、学生の要望はもっともだと思いつつも、交渉はあくまで平行線をたどらざるを得なかった、と山田先生もお話になっていました。最終的には教学権の剥奪であるということで学生側から提訴がなされて、国が被告で主事が代理人ということになったようです。この提訴も裁判所によって却下されたのですが、この件については新聞にも取り上げられていたと思います。

それならということで、第二部学生諸君の就学条件を少しでも緩和しようと、いろいろ努力がなされました。その1つに大学までのバスの路線延長と増便を図ろうと、阪急バスの本社や労組の幹部と何度もじか交渉がおこなわれたようで、その結果、これが後の学内乗り入れにまでつながるのですね。いまにして思えば、これがせめてもの慰めと言えるかもしれませんが、通学の足の確保にも、このような関係者皆さんのご苦勞があったようで

す。

そのほかに私が少し覚えているところでは、移転当初は第二部の時間割にも工夫がなされて、当初何年かは1校時が80分に短縮されて、始業時間も6時20分からとするような措置がとられていたのではないかと思います。後になってバスも増便されて、少しは通いやすくなったということで、また90分に戻されるのですが、移転当初は第二部では1校時が80分だったと思います。

移転に関する議論のなかで、上本町8丁目のキャンパスを手放すことなく、その地に高層ビルを建てよと、必要な運動場は花園まで出向けばいいじゃないか、といった意見もありました。しかし、それについてはキャンパスの地は「消防法」の規制があって高層ビルが建設できないし、先の大戦で戦火を受けた学舎は構造上の危険があって、その上に高層の積み重ねは不可能ということで、大学が必要とするスペース確保のためには、ほかにもっと広い敷地を求めざるをえないのだ、というのが、上本町キャンパスを活用せよといった意見に対する説明であったと思います。

移転によって広大なキャンパスが出現しましたし、本部棟とか図書館とか、教室・研究室からなるA棟、B棟など、用途別の建物が移転時には建設を終えていましたが、私などはその大きさに戸惑ってしまうことがありました。研究室も個人研究室になって、いろいろと大きな変わりようで、戸惑うことも多かったですね。われわれ皆が感じたことではないかと思いますが、これからは内なる充実が求められるといった声が、いろいろな場で、いろいろな機会に上がっていました。

当時、われわれ教員も遠くなるとか通いにくくなるというような、不満めいたことも言っておりましたし、休みなどにこちらへピクニックがてらに来られた同僚からも、「遠くなるよ」とか、それに類することを聞いていたんですね。しかし、先ほど申しましたように、そのときの第二部の学生諸君のなかには、この箕面移転が絶望的な問題になって、どうしても大学には通えなくなり、やむなく大学を去っていった人たちもいたのです。特にこうした第二部の学生諸君には言い知れぬ犠牲を強いたわけですから、そのことを考えてみれば、通うのが少々遠くなっても、そんなことは取るに足らないことになると思うんです。

やはり移転は大学にとっては必然であったのですが、繰り返しになりますが、時間的あるいは距離的に大学へ通えなくなって去っていった学生諸君のことを、ここでもう一度思い起こしておく必要もあるのではないのでしょうか。

これで移転の問題は終わりにしておきます。

**進藤** いま旧外大の土地に大阪国際交流センターという非常に立派な建物があります。あれが建てられるんだったら、外大もあそこに建て直せたのではないかと思ったりすることもあるのですが。

**中岡** そうですね。箕面へ移転した後で聞いた話なんです、大阪外国語大学がこちらへ移転した後に消防法が改正されたということなんです。だから、いま高層ビルになってそびえる上本町8丁目の国際交流センターは、消防法改正後の高層化であるようです。消防



法が立ちだかっていたわけで、先ほど申しましたように、高層化を積極的には考えられなかったのかもしれない。そこが微妙な点ということにもなるんでしょうが。

**菅** 万博跡地への移転という話は、私はこれまであまり知らなかったのですが、それは教授会などでも半ば決定的な感じでとらえられていたんでしょうか。

**中岡** はい、皆がそう思っていたのではないのでしょうか。万博が始まる前に、世界のいろいろな国から来訪者があるので、外大としても協力をしてほしいと万博関係先から要請があるので、そういう機会にはできる限り協力をするように、というお話が教授会の場で学長さんからあったと思うんです。そして、そういうことをも含めて、外大だけではなく、もちろん阪大が第一で、大阪教育大学も万博跡地への移転を希望していて申請をおこなっている、ということも聞いたと思います。申請をおこなっているという段階であったのか、あるいはもっと話が具体化していたのか、そのあたりは私には分かりませんし、大丈夫だということを伺った覚えもないのですが、そのような移転の話が教授会であったわけで、何となしに万博跡地に行けるもの、というような期待を皆が持っていたのではないのでしょうか。

## 大学改革

**進藤** ありがとうございます。やはり箕面に移転して、いろいろ施設も充実し、これからは内なる充実が求められるというお話でしたけれども、その後やってきた大学改革が大きな波であったかと思えます。そこで、このことについていろいろとお伺いできればと思います。

**中岡** 実は、大学改革の中心的な存在として活動した将来計画委員会をはじめ各種委員会があったのですが、私はそういう委員会の委員でもなかったので、ある意味では受け身で改革の諸提案を聞かせてもらう立場でしたから、あまり具体的なお話ができません。

ですから、この問題についても、実際の改革に当たられたときの学長の山田先生に少しばかり当時の状況をお伺いして、そのお話をまとめてみました。ですから、これから申し上げることも、山田先生が当時を思い起こされて、いろいろお話しいただいたことが中心になっております。

続けますと、山田善郎学長は昭和62年3月から平成5年2月まで学長として在任されましたが、平成3年3月に第2期目の学長に就任されて、その最初の教授会で大学改革に着手する旨の発言をなさっています。

それは具体的には「向こう2年間に大学改革を成し遂げることを目標として掲げたい。については時代に即した大阪外国語大学のあるべき理想像を求めて、長年にわたり議論されてきた全学の意見を集約して、学生の要望に応えるためにも全学の叡智を集めて行動いただきたい」、という教授会への呼びかけであったと思います。

そこには、文部省からの教養課程改編を促す働きかけもあったでしょうけれども、大学内部の問題として、時すでに顕在化していた教授定員の行き詰まりからくる不公平感、特に教員間の不公平感を、大講座制を敷くことによって打開したいということと、もう1

つは迷路に入り込んでしまった複数語学科にまたがる教官ポストの貸し借りの問題をも清算しようとする意図もあったようでした。また、それに併せて大学院博士課程実現への構想もひそかに練られていた、ということも伺いました。ですから大学としては、研究・教育面の充実を目指しての改革という大命題に加えて、緊急に解決を迫られている積年の問題として、いま申しましたような難問をも抱えていたのではないのでしょうか。

それから2年間、将来計画委員会をはじめとして、全学のほぼすべての委員会が夏期休暇を返上して、教育と研究の合間をぬって、改革のための作業に邁進した、と伺っています。このように教員、職員が一丸となつての全学挙げての約2年間の作業が、平成5年に大学改革として結実したと言えるのではないのでしょうか。

なお、その2年間に膨大な作業がなされていますけれども、これは先生方もご存じの平成6年3月刊『大阪外国語大学の現状と課題』（以下『現状と課題』）からも読み取れると思うんです。それに併せて、平成5年の学科改組で、いわゆる外国語学部が国際文化学科と地域文化学科の2学科に分割されましたが、その学科改組に至るまでの大学としての改革の歩みというか、平成5年までの大学としての内部的な改革の歴史は、この『現状と課題』に詳細に記録されています。

特に山田先生の後を受けられた池田修学長が『現状と課題』の巻頭言で、諸委員会の作業の結果を踏まえて、新しい体制に移行する大学のこれからについて、「本学の優れた伝統を守り、さらに厳しく学生の言語運用能力を高める努力を傾けながら、新しい時代の要請に答えていくことは決してたやすいことではない」、と新しい体制に臨んでの所感を述べられ、大学全体に対して、新たな外大創りに向かつての努力を求めておられます。

こうした議論を前にして、いろいろなことが回想されるのですが、それを少しばかりお話しさせていただいてもいいのでしょうか。

**進藤** 先ほど、先生が大学改革の中心的な立場におられなかった、中心的な部署におられなかったというようなお話がありましたけれども、逆にそうではないからこそ、いろいろとお感じになれることもあったのではないかと思いますけれどもいかがでしょうか。

**中岡** 皆さん、すごいエネルギーで委員会の仕事をやっておられる、ということは感じましたね。それは、ただ単に委員会のいわゆる教員のメンバーだけではなくて、職員の方も、いろいろな教授会での発言で補足的な説明をされるような場合でも、非常に積極的な役割を果たしておられるような感じを受けました。

ですから、先ほども少し申しましたけれども、こういう場合は必ず「全学を挙げて」とか、「一丸となつて」とか言うんでしょうけれども、言葉だけの問題ではなくて、実際に大学全体を挙げてやっているというような感じはしましたね。

**進藤** つまり熱気があったと。

**中岡** そういふことだと思います。

**進藤** そのような、まさに大学挙げての改革のなかで、イスパニア語専攻もいろいろと変わっていくところがあったと思うのですがいかがでしょうか。

**中岡** はい。それより少し前のことからでも構いませんか。

**進藤** はい、結構です。

**中岡** イスパニア語専攻の事柄も含めて少し述べさせていただきますと、まだ私が学生であったときですが、後期に入っても相変わらず実習の時間が大きな比率を占めていました。われわれは何か、それに対して不満めいたものを感じたんでしょうね。この大学での勉強はいかにあるべきかと、学生なりに議論したことが何度もありました。

もっと実習が必要だ、と言っていた人もあります。しかし大学として専攻語の学習以外に、ほかにもそれに関連してその周辺で横断的にいろいろ工夫ができるのではないかと、もっとほかにも何かがあるのではないかと、といった声もありました。きっと他の語学科でも同じようなことが議論されていたと思いますが、大学全体として、その議論が大きな動きにまとまることはありませんでした。

ただ、ある先生は「外大生に二重勉強論」を唱えられていました。そして、その先生の授業に出席してきた同級生が、目を輝かせて、聞いてきたばかりのことについて熱っぽく語ってくれたことを覚えています。専攻語の学習だけに安住せずに、何かもう一つを意識的に求めてそれをも勉強せよ、ということではなかったかなと思うんですが。

大学の歴史のなかで、昭和30年代には、外大を卒業されて、その後、京都大学などに進学されて、また母校に帰ってこられた少壮の先生方が多くなっていました。そうした先生方には、ひたすら専攻語の学習に集中する大学の姿勢が説得力を欠いていたのでしょうか、それが批判されて、大学における研究の理念を求めて、外大アカデミズムなる言葉が声高く語られるようになってきていました。

そして予想されるように、こういった議論のなかでは伝統的な、専攻語を中心とする言語教育優先の姿勢が疑問視されたり、否定されたりすることもあったのですね。キャンパスには自治会が、「通訳養成教育を排せよ」という立看板をあちらこちらに掲げていました。ただし、通訳といっても、外国語を少し勉強したぐらいで簡単にできる仕事ではありません。ですから、通訳ということ、どのように考えてそんなことを書いたのかははなはだ疑問なのです。

教授会でも、言語教育中心のカリキュラムに疑念をはさむような発言が聞かれて、それに対して、ある日の教授会で歴史学の広實源太郎先生から「外国語大学は外国語の研究・教育をなすべき大学ではないのか」、との指摘を受けたこともありました。また、「大阪外国語大学」という名称を変更したらどうかといった発言も一度聞いたことがありますね。真意は少し諷刺かねますけれども、そんな発言も出たと思います。

**進藤** 広實先生は著名な方ですけども、歴史学の広實先生から、逆にそういう発言が出るというのは面白いなというふうに思ったのですが。

**中岡** そうなんですよ。おっしゃるとおりでして、先生がそうした発言をされたということは、特に一部の先生方が、いま申しましたような言語教育中心のカリキュラムを批判したり、ときには否定したりするような発言をされたことに対する、もう一方からの修正意見であったと思うんですね。それは間違っていると、外大はやはり外国語の研究・教育を根幹にしなければいけないのだということだったのですね。ですから、その時期は外大と



しては、アイデンティティが揺れていた時代であったと思います。

**進藤** はい、では続きをお願いいたします。

**中岡** はい。将来計画委員会が平成3年11月の教授会に提案し承認された大学改革構想案によって、外国語学部は新たに2学科、国際文化学科と地域文化学科とに改組されて、従来のイスパニア語学科は、先ほどお話しいただきましたが、それぞれヨーロッパⅢ講座、南欧地域文化専攻スペイン語と、アメリカ講座、中南米地域文化専攻スペイン語の2つのセクションに分割されることになりました。このように2つの地域文化専攻に分割されたのは、英語、イスパニア語、ポルトガル語の3専攻言語でした。

これよりも前に、将来計画委員会は次々と作業を進めていて、順次その構想を教授会に提案してきていたわけですが、そういう将来計画委員会からのいろいろな提案のなかで、最終的な提案の前に、イスパニア語とポルトガル語とを南欧地域文化専攻としてグループ化した構想も提案されたのではないかと思うんですね。

最初、私はむしろ、この構想の方がいいのではないかと思ったのですが、最終的な委員会案は、すでに申しましたように、英語、イスパニア語、ポルトガル語の3語学科で、英語は違いますが、イスパニア語とポルトガル語だけに限りますと、ヨーロッパⅢ講座とアメリカ講座への二分属ということであったのです。

それでイスパニア語の場合ですが、新旧大陸を俯瞰しますと、世界のスペイン語圏の人口は、スペインで刊行の百科事典（2003年版）によりますと、概数ですが、スペインが40,128千人、中南米（プエルトリコも含めて）全体で327,346千人となり、これにアメリカ合衆国のヒスパニックと呼ばれる人々の23,837千人を加えると、総計で約391,311千人にも達することになります。

そのなかでも、中南米とアメリカ合衆国のスペイン語話者人口は、351,183千人になります。この人々の話すスペイン語は、スペインのそれとは大きく違った自然、地理、社会などの条件の下で用いられているものなのですね。このような現実を、どうでしょうか、異質な南欧地域文化専攻といったヨーロッパ中心の枠組みのなかに組み込もうとすることは、やはり不合理なのではないかと思ったのです。それに、言語に加えて、相互に異色さを競う歴史、文化、文学、人々などの存在を考えると、われわれも結局はヨーロッパⅢ講座南欧地域文化専攻とアメリカ講座中南米地域文化専攻の2つの領域に分けた委員会提案を受け入れざるをえなかったというか、受け入れるべきであると決めたのだと思います。

**進藤** それでイスパニア語は具体的にはどうなりましたでしょうか。

**中岡** はい、新制度のもとに、ヨーロッパⅢ講座南欧地域文化専攻スペイン語と、アメリカ講座中南米地域文化専攻スペイン語の2つのセクションに分属して、平成5年4月から新たなカリキュラムが実施されました。将来計画委員会からの提案では、イスパニア語学科の教員分属として中南米地域文化専攻スペイン語には4名が指定されていました。そして私もそちらに入っていたんです。私を除きます3名の先生方は、その研究領域で、まさしく中南米を専攻される研究者であったので、当然、中南米専攻に配置されるべきでした。

しかし私の中南米専攻への配置については、その理由がよく分かりませんでした。しかし、また私が異議をとなえると、そこで時間も取りますし、それに数年で定年を控える身でもありましたので、中南米専攻でできる限りの努力をしようと決めて、そこでこの配置を受けすることに決めました。

もちろん、それまで中南米スペイン語について関心もあり、論文も読んでいましたけれども、自分の基本的な研究テーマとして正面から向き合ったことはなかったのです。その意味では、与えられた領域で職務を十分に果たせるかなという危惧は当然ありました。

それで手始めに図書館に行ってみたら、やはり基本的な文献がないんですね。イスパニア語学科ではそれまでも中南米スペイン語の授業を置いていましたが、その領域を専門とする研究者がないというのはいけません。基本的な文献というものの整備ができていませんでした。ですから私としては、中南米専攻におります間に、この空白の部分埋めるべく努力をしたつもりですが、ただ私の定年後、そのポストが凍結されたようで、また中南米スペイン語研究に空白ができるのではないかと心配しています。辞めるときに、文献などこれだけは頼みますと言ってお願いはしておいたのですが、それも現実にはなかなか難しいことであるかもしれません。予算の関係もありましようね。

そういうことで、少し私の個人的なことになってしまいましたが、先ほども申しましたように、再度『現状と課題』を読んでみますと、この将来計画委員会が外国語学部の学科再編成を提案するに際して、特に地域文化学科について、その存在理念というものを示していると思うんですね。

それによりますと、外大アカデミズム論争以降、外大のアイデンティティに関して数々の模索がなされてきましたが、ここに至って初めて、専攻語の研究・教育と地域研究を機能的に組み合わせるための具体的な理念が示されているのではないかと思います。ただ、大阪外国語大学としましては、この理念に基づく具体的な研究・教育のモデルづくりを始めていたのでしょうけれども、統合によってそれも道半ばになっているかもしれません。しかし、新たに、これからは大阪大学外国語学部として、これまでの蓄積も十分に活用して、総合大学における外国語学部としての展望を外国語研究と教育の分野で切り開いてほしいと願っています。

### イスパニア語かスペイン語か

**進藤** 大学改革を通じて、それまでずっと議論されてきた大阪外大の姿というのが、だんだんと明らかになってきたと思います。よく名は体を表すと申しますが、私たちのような改革後しか知らない人間にすると、スペイン語というのがあたりまえであって、イスパニア語というのはちょっと違和感がありますが、そのへんはどういうかたちで決まったのでしょうか。

**中岡** イスパニア語かスペイン語かという問題については、いまお話のとおり、これまでもいろいろ議論がありました。少しお話いたしますと、この大学改革に関連して将来計画委員会から、これまで用いてきた専攻言語の名称、イスパニア語をそのままに続け

て用いるか、それともスペイン語に変更するかは照会があったわけですね。委員会の検討事項のなかには、専攻語の名称の検討もあったのかどうか私にはよく分かりませんが、とにかく照会がありました。もちろんのこと、大切な問題だったので、イスパニア語学科の専任教員10名が集まって協議しましたが、スペイン語に変更することに賛成する意見が7名と多数で、それまでのイスパニア語はわれわれ年長者3名だけの支持しかなかったんです(笑)。年長者と言いますと、吉田秀太郎先生、森本久夫さん、そして私ですが、この3名だけの支持しかなかったわけです。

『広辞苑』を引いてみましても、「イスパニア [Hispania]→スペイン」とあって、もう一方の「スペイン」に送ってしまっていますね。そしてスペインの項には「スペイン [Spain 西班牙]」とありまして、かなり詳しい説明が出ています。

こんなことも思い出しました。少し時間を取るかもわかりませんが、この改革の作業と関連してでしょうか、大学が、いわゆる大阪の会社とか団体に、今後、大阪外国語大学はどのような地域あるいは言語を専攻語として、あるいは専攻語でなくても研究対象とすべきか意見をいただきたい、という旨のアンケートを出したことがあったようですね。

そうしますと、スペイン語をやれという回答があり、しかもそれが複数あったようです。そういうことも、やはり委員会からの照会のきっかけになったのではないかと思うんです。スペイン語とイスパニア語というのは、少なくとも同一言語を言い表すことができる名称だ、というような認識は一般にはないのかもしれないですね。

ですから、そういうことであれば、やはりスペイン語にして、はっきりとこれはスペイン語なんですと明示するほうがいいのだろうと、私も、このイスパニア語という名称にはいろいろ思いはありますが、それはそれとして、スペイン語に改称するのもやむなきことと思ったのです。

これまでもお話ししましたわれわれの恩師アルバレス先生は、日西交渉史の世界的な権威で、ローマのイエズス会古文書館にもいろいろな関係をお持ちの世界的な研究者であられたのですが、そのアルバレス先生は、「イスパニア」なる国名は、すでに16世紀から日本でも用いられてきている、由緒ある国名であると力説されていました。ですからそういう意味からしても、歴史的に重みのある伝統的な名称であることには疑いを挟む余地はないのですが、イスパニア語をやっているのにスペイン語をやれと言われるようでは、それはやはり困るということでしょうね。

それで、調べましたら、昭和19年4月1日からイスパニア科として外事専門学校が始まり、昭和24年5月からイスパニア語学科として大学でのイスパニア語が始まっているということになっていました。ですから、イスパニア科、イスパニア語学科という伝統的な名称は約50年もの間使われてきていたのですが、この段階に至って、スペイン語に変更されるということになったのです。

## メキシコ調査団

進藤 やはり大阪外大となると、外国に実際に行ってみるのが当たり前という考えもある

かと思います。しかし先生の世代だと、外国に行くというだけでもいろいろ大変なことがおありになったのではないのでしょうか。それについて、いろいろとお話をお聞かせいただけますでしょうか。

**中岡** 実はメキシコ調査団という研究班が、大阪外国語大学イスパニア語学科から派遣されていますので、それについて少しお話をさせていただきたいと思います。

時間的には前後するのですが、スペイン語の世界を初めて私が見せてもらったのは、これはまさしく僥倖というべきでして、昭和38年2月から5月までイスパニア語学科メキシコ調査団に参加させてもらって、アメリカとメキシコに行ったときでした。「参加させてもらって」と言ったのですが、これには次のようないきさつがあります。

この計画が実現する何年前に、東京の慶応大学の学生グループではなかったかなと思うのですが、メキシコ研究班を組織して、自分たちで資金調達から始めて、ついにその計画を実現させた、という話が新聞に報道されたことがありました。このような先例に触発されたのでしょうか。イスパニア語学科の3年生の学生4人が自分たちでメキシコ研究グループをつくって、かの地に赴いて、スペイン語世界の实情に触れて、その知識を深めようと考えたようです。彼らは実に行動力のある4人でして、イスパニア語学科の先輩のもとや関係企業を訪ねて、その計画を説明し浄財を仰いだわけですね。

当初、この活動はひそかに彼らだけのものとして進められていたようですが、当然そこには「大阪外国語大学イスパニア語学科」が出てくるわけで、そうした協力を求められた卒業生からは、学科主任の國澤先生のところへ照会が寄せられるようになり、それで先生は初めてこうした活動をしている学生グループがあるということを知られたわけですね。そこでその4人を呼ばれて事の子細を確認されたら、すでにかなり広範囲に活動が進められていることが分かり、先生は外部に迷惑がかかりかねないようなこういった活動の即時中止と、それまで集めた浄財を直ちに関係先に返還するようにと申し渡されたのです。

しかし事態は、その資金を協力いただいた関係先や諸先輩にお返しするには、もうすでに難しい段階に立ち至っており、それだけではなく、ここで計画を中止したとしたら、メディアとかほかの企業に対しては、大学としての信用にかかわるような状況も発生しかねないようなおそれもあったようでした。

それで國澤先生は、こうした調査団の派遣の可能性を大学当局に打診されたのですね。学生だけで行くのはどうだろうと。しかし大学側の答えとしては、教員の引率者がいなければ学生だけのグループの派遣はだめだということで、最終的にはイスパニア語学科の先生方と相談されたのでしょうか、それ以降は、この計画を学科で管理し教員1人が責任者となって活動の助言をもし、最終的には彼らのメキシコ行きを認めよう、という結論が出されたようです。

その結果、山田先生が責任者になられて、きっちりとした形で計画が進められる、ということになりました。そして話がより具体化してきて、このグループの人員構成は団長が山田先生、団員は当事者学生諸君4名となったのですが、経理処理や学生の指導にもう1人の助手が必要じゃないかということで、たまたま私が参加させていただくということに

なったのです。こうしたことが「参加させてもらって」ということの原因になります。

それで学科主任の國澤先生が、川崎汽船にお勤めのイスパニア語学科の先輩にお願いをしてくださって、行きは2便に分けて横浜－サンフランシスコ間、横浜－アカプルコ間の貨物船に、帰りはロングビーチ－横浜間の貨物船に乗せていただけるということになりました。1日1,000円という本当に申し訳ないような船賃で乗せていただきました。

**進藤** 1人1日1,000円ですか。

**中岡** ええ、1人1日1,000円でした。

学生諸君は新聞社にも援助を仰いでいて、メキシコから原稿や写真を送ることを約束していたようです。そのようなことから、団長と私が横浜から出発しようとしていたときに新聞社やテレビの取材がありまして、私はびっくりしました。しかし、団長さんがいろいろインタビューに答えておられたと思います。

そして横浜からサンフランシスコまでは10日の船旅で、私は最初の2日ほどは船酔いをしたのですが、あとはおおむね快適な日々で、目的地に到着するまでの船での生活はまさしく船旅ならではのものです。船長さんをはじめ乗組員の方々からいろいろ面白い逸話を聞かせていただいたり、毎日定時に船橋に行って、海図をもらっておりましたので、その日の船の位置を書き込んで、船長さんにちょっとした航海上のコメントをもらったり、あるいは機関長さんや無線局長さんのお部屋へお邪魔したりして、楽しい日々を過ごしました。

面白かったのは、船が1日に航行した距離にしたがって、アメリカ西部時間に船内時間を調整していくわけですね。毎日30分、45分と進めていくんです。ですから、特に晩ご飯が早くなるわけです。こういう慣習があるのかと思いましたし、また日付変更線を越えたその日には、夕食にお祝いのビールが出るのです。これも航海上の習慣なんだということをお教えました。

こうした楽しい航海をしてサンフランシスコに着いたのですが、夕方の到着でした。翌朝、船の窓から見たサンフランシスコの町の様子を、いまでもはっきりと覚えています。本当にきれいな町で、坂の町全体が海のほうに向かってなだらかに傾斜してきている、清潔な町だなと思いました。昭和38年2月14日でした。

それからカリフォルニアを南にとって、国境の町カレクシコに着きました。すでに47年も前のことですが、首都から遠く離れた両国の国境の地に大学第6回イスパニア語学科卒業生で三井物産の今西統衍氏がおられました。メキシコ側の町はメヒカリというのですが、そこにも大学第3回卒業生で伊藤忠商事の一圓貞治氏がおられるというように、アメリカとメキシコの国境の地域にまで、商社の駐在員としてイスパニア語学科の卒業生がおられたのです。

それにまた国境という存在は、私に非常に興味のある顔を見せてくれました。ここでは接する2国間の力関係というのが凝縮されて現れていると思うんです。アメリカとメキシコの国境地帯は、ヨーロッパなどとはまた違うだろうと思いますね。いまでもそうでしょうが、当時のアメリカは世界一裕福な大国でしたが、それに対してメキシコというのは、



どちらかと言えば北の大国に比べてみれば、後進国的なところがある国だと言えるのですが、アメリカ側の町カレクシコでは人口1,500人、メキシコ側のメヒカリでは人口17万人。単に金網だけがあってそれが国境として国を南北に隔てているわけですが、常に3度ぐらい温度差があるといったことも知りました。そして、アメリカ側からは、大型乗用車にトレーラーを引っ掛けて、メキシコ側に入っていくアメリカ人が目立って多いのですが、それとは逆に、朝のラッシュ時には、今度はメキシコ人労働者が長蛇の列をなして、徒歩で国境のゲートに入って行き、夕方にはまた長蛇の列で出てくるわけですね。

ですから、こういう2つの国の間に介在する力学、経済力の違いというか、いろいろな段差をそこではっきりと見せてもらった、という思いでした。こういう現実があるのだと認識させられた場所でしたね。

その次に、フランク・シナトラが『South of the Border』という歌を歌っていますが、それよろしくメキシコに入って、その国境からメキシコシティまで長距離バスで予定は48時間だというのですが、何時間も遅れて50時間以上かかって、へとへとになってメキシコシティに着いたことも、非常に楽しい思い出ですね。

メキシコシティでは、当時、武田薬品のメキシコ駐在員で第2回卒業生の村田誠良氏をはじめ、在メキシコの諸先輩から数々のご配慮やご援助をいただきました。このときすでに10人近くのイスパニア語学科の卒業生が駐在員としておられて、われわれの訪墨をととても喜んでくださいました。このように先輩がおいでになりますと非常に心強く、メキシコに来たなという感じになりましたね。

メキシコシティでは、4名の学生諸君は当時の内務次官ルイス・エチェベリア氏の私宅にお世話になり、山田先生と私は市内のビジネスホテルにいました。このエチェベリア氏は、後年ご承知のようにメキシコ国大統領に選出された大政治家ですが、先にお話ししました武田薬品の村田さんが親しい間柄でおられたようで、そのエチェベリアさんのご夫人に学生が来るということをお話しになったら、4人を私の家でお世話しようと言ってくださったそうなんです。ですから、学生諸君4人はメキシコシティ滞在中、ずっとエチェベリア氏のお宅にお世話になっていました。

このエチェベリア氏は政界引退後、われわれの大学に来訪されて講演もされています。講演後の懇談会の席上で、イスパニア語学科の学生5名と教員1名とを3週間メキシコ旅行に招待するというお申し出をいただきまして、森本先生に引率された学生諸君が出かけていって、ずいぶん楽しいメキシコ旅行をしてきたようです。

そして大阪外国語学校時代の西語部第10回(昭和9年)の卒業生で、戦前からずっとメキシコのナヤリット州トゥスパンにお住まいの足立陸氏、第二次世界大戦中は日本人だということで、どこかに形のうえだけ拘束されたとおっしゃっていましたが、この大先輩から、その地にも立ち寄るようにとのメッセージをいただいていたので、アメリカに向けて北上するときに何日もお世話になりました。この足立先輩はその地での成功者で大歓迎いただきましたが、ドイツ語学科の赤阪力先生とご同期で、お知り合いのことでした。

メキシコでは、学生諸君があらかじめ予定していた大学を訪ねて調査や懇談会をしたり、ときには日本について簡単な講演をしたりしていました。あるときは、州知事のところに行くから一緒に行ってくださいと言われて行ったこともあります。学生諸君は多方面に日本からコンタクトをされていて、結局は訪問できなかつた大学などもあるほどでした。

また、メキシコの南部と北部を移動するには、ありがたいことに、メキシコ日産自動車から無償でブルーバード2台の貸与を受けたのです。あるとき学生諸君がユカタン半島を旅行中でしたが、1台が故障して、そこでは部品が得られないということで、メキシコシティーの倉庫からそれを頂戴して届けてほしいという連絡が、ちょうどメキシコシティーにいた私のところにありました。どうやら荒っぽい運転をしていたようで、私が部品をいただきにメキシコシティーの倉庫に行きましたら、その何人かのメキシコ人技師が出てきてくれて、「こんな部品が粉々に割れるなんて初めてだ」と言うんですね。「いったいどんな運転をしているんだ」と言って目を丸くしていたのを覚えています。

こういった部品も、もちろん日産自動車から無料で頂戴したわけで、本当に日産自動車のご援助には、いま思い出しても感謝の言葉しかありません。おかげさまで、学生諸君は2台のブルーバードで、元気いっぱい各地を旅行して見聞を広め、歴訪した大学ではそれぞれのテーマの調査も行なっておりました。

こういった形で交歓や調査を重ねて、帰りはロングビーチから調査団6名全員が、すでにお話ししましたように、川崎汽船の貨物船に乗せてもらうことになっていました。そこでメキシコから北上して、指定されていた日の2日ぐらい前にロサンゼルスに到着し、川崎汽船ロングビーチ支店に確認のため出向きましたら、われわれの待つ船は、積み荷の関係で途中から中米のどこかの港に引き返してしまい、到着が予定よりも1週間ぐらい遅れるということだったんです。

船の予定どおりの到着を当て込んでやってきましたので、調査団の資金もほとんど底をついていたんですね。困ったなということになったんですが、山田先生が、これまでもこの研修旅行でいろいろとお世話になりました三井物産カレクシコ支店長の今西統衍氏に電話をかけられ、一時の資金の用立てを依頼されたのでした。誰かが頂戴に行くことになり、私が行ってこようということで再度国境の町に出向きました。1週間6人分で300ドルでしたが、それをお借りして帰ったわけですが、そのときに今西さんは「300ドルでいいのか」とも言ってくださって、本当に仏さんみたいに見えましたね。

カレクシコへの行き帰りですが、グレーハウンドのバスは、レモン畑のなかを3時間ぐらい走るんですね。すると入ってくる空気がレモンの香りで、いまはよくアロマセラピーとか言いますが、まさしくあたり一面レモンの香りが充満していましたね。両側がレモンの畑で、初めてあのようなところを見せてもらい、サンキストを実感しました。

このような旅を重ねますと、皆がメキシコの太陽に焼けて、独特の顔色になるんです。日本で焼けるというのは、また違うんですね。そうすると、大きな荷物を持って、つばの広い麦わら帽のような大きな帽子をかぶっているものですから、アメリカのホテルで、「あなた方は短農ですか」と何度もたずねられましたね。当時、日本からアメリカに農業

労働に出向く人々がいたようで、短農とはそのような人々のことを言うのだと教えてもらいました。

遅まきながら待ちかねた船も到着して、5月29日に無事に横浜に連れて帰ってもらいました。そして昭和38年2月4日から、およそ100日にもおよぶ調査旅行で、この間、本当にたくさんの方々のお世話になり、メキシコの多くの場所を訪ねることができ、実に貴重な勉強や経験をさせていただきました。私自身にとっても初めてのスペイン語圏での貴重な体験でした。あらためてお世話になった皆さんに、ここで感謝を申し述べておきたいと思います。

この旅行の本来の出発点となる企画をした4人の学生諸君(第12回、昭和39年卒)は、卒業後この経験を生かして、それぞれユニークな活動の場を見つけています。もうすでに一線を退いている人もあると思いますが、ニューヨークでの画廊経営(芦田周道)、商社(勝俣済。メキシコ・サントリー社長)、中南米を中心とする世界考古美術品輸入取扱業(三浦鴻)、ジャーナリズム(滝本道生。毎日新聞外信部長、英文毎日編集局長、麗澤大学教授、平成16年没)、と、皆それぞれに見事な成果をあげてきております。この4人の諸君は、本当にメキシコ研究旅行が大きな糧になって、人生の次のステップに踏み出していったということが分かりますね。

**進藤** しかし、その時代にすでに行く先々に卒業生がおられて助けていただけるとするのは、すごいことですね。

**中岡** 本当にありがたいことでした。ロサンゼルスまで行ったのはいいが、6人で1週間の船待ちですから、どなたかからの一時用立てがないことには、次の日の行動にも支障が生じてきます。「ウイニー」というウイナーソーセージと、ちょっとしたトーストとコーヒーで80セントか90セントしたと思います。朝食がそれですね。1日3ドルで何とか1週間辛抱しろ、ということで待っていたら、船が来てくれました。なお前後しますが300ドルを貸していただけたので、ほっとして、私はそれを固く胸に抱いてロサンゼルスまでグレーハウンドに乗って帰ってきました。いま思い出しますと、非常に愉快的思い出ですね。

予算総額は150万円少しでしたね。調べましたら、昭和38年度の国家公務員の大卒(I種)初任給(基本給)が17,100円になっていました。ですから、そのときの150万円の予算総額というのは大きな金額だと思うのですが、この4人の学生諸君は本当によくやりましたね。すごいと思います。なお、総予算の内、66万円が団員6名の個人負担でした。

**進藤** でも、そう考えると最後の300ドルは結構痛手でしたね。当時1ドル360円ですね。

**中岡** そうです。

**進藤** そうすると、総予算の1割弱ぐらいをお借りしたということになりますか。

**中岡** ええ、そうですね。それで帰ってから、そのお借りした金子は、今西さんのお父さんが高知大学の先生として高知におられたので、山田先生と私でお返しに行きました。おかげさまで高知まで行きました(笑)。

**菅** 本当にそういう旅行を企画した学生の行動力というのには驚くばかりですが、昭和

38年ごろのイスパニア語学科の学生というのは、だいたいそういう活発な人たちが多かったんでしょうか。

**中岡** 個性的な人が多かったですね。それに帰ってきたら4年次ですが、4人とも皆大きくて貫禄があるんですよ。ですから、旅行中でもそして何かの場に行きますと、1人の学生は引率者に間違われるんです。メキシコ・サントリーの社長になった勝俣君ですが、ものすごく押し出しがいいのです。私はこのとおりの貧粗ですから、一緒に行きますと初対面ではよく彼に挨拶が行くんですね。引率者だと思うんでしょうね。「いやいやこちらの方です」と彼はいつも言っていました。外見も外見ですが、この4人の諸君に限らず元気があるといえますか、自分をはっきり主張する学生が多かったのではないのでしょうか。

**進藤** いまの学生には想像もつかないような行動かと思いますが。

**中岡** そうですね、行動もそうであり、社会の雰囲気もこれからだという勢いが感じられましたね。

### ローマ教皇立カトリック大学

**進藤** 貴重なお話をありがとうございます。

先生もさまざまな海外経験がおありのなかで、やはり歴史として残さなければならぬと言いますか、ここでどうしても伺っておかなければいけないお話が多々あるかとは存じますが、ここでは一点、ローマ教皇立カトリック大学のことについてお話いただけますでしょうか。

**中岡** では、いまのお言葉を受けてお話をさせていただきますと、平成2年3月から平成3年1月まで、ローマ教皇立カトリック大学東洋研究学研究所で講義をする機会を与えられました。これは国際交流基金による日本文化振興プロジェクトの一環としての日本人教員の派遣でした。私よりも前に外大からは、吉田先生と森本先生が、それぞれ日本文学と日本美術の講義を担当されてきておられました。このプロジェクトの推進役の一人がわれわれの同僚の染田秀藤さんで、われわれの派遣も染田さんの推薦によるものでした。

加えて、このペルー・カトリック大学は、イスパニア語学科客員教授として2回にわたって計5年間、外大に在職された故オスカー・マビラ教授の本務校でもあって、そういう意味でも外大とペルー・カトリック大学とは親密な関係にあったのです。ですから、リマに滞在中は、お元気だったマビラさんに公私にわたりいろいろお世話になりました。

この大学では、私の場合ですが、前期セメスターには学部前期課程の学生諸君に、日本文学入門の2時間の授業を週2回担当いたしました。専門に勉強してきた分野ではないので心細いなと言ったら、マビラさんが「いやいや、ここではあんたが誰よりもよく知っているんだ」と言ってくれたので、その言葉に勇気づけられて、日本の小説や詩など自分の好きな作品を中心に、勝手なことを話させてもらったと思います。

後半は言語学専攻の学生諸君10人ほどに、日本語文法のトピックスと思える事項を、特に形態論と統語論から選び出して、スペイン語と比較して話をしました。例えば、日本語は冠詞を持たないとか、形態論的には名詞、形容詞にはスペイン語のような-sとか-es

付加による複数形がないことを話しますと、形態論上、名詞、形容詞に複数形がないなんて考えられない、というようなことを学生諸君は言うわけですね。いやいや、それでも大丈夫なんだと説明して、いろいろ議論もしましたし、そういう意味で非常に有意義な日々だったと思います。その学生諸君からは、日本語の現象のいくつかについて、先住民語のケチュア語とよく似ているというコメントもありました。

あるとき、大学主催の「日本週間 *Semana de Japón*」が1週間ほどありまして、茶道や華道のデモンストレーションとか映画会とかが催されたのですが、そこで日系の詩人を紹介されました。その詩人は本務が建築家であったのですが、その年の最優秀詩人賞を受けられたという方でした。

少し話をしていたらその人から、「父は私が小さいときから私に日本の詩や小説の話をしてくれました。そんな日本のことを語り合いたいのに、これまで会った日本人学生は、誰一人として『源氏物語』のことを知らないじゃないか」という意味のことを言われたんですね。その詩人は非常に悲しそうな顔をしておられました。このことがいまでも忘れられないのです。「失望した」と言われたのには私も返す言葉がなくて、何か言い訳めいたことを言ったと思うのですが、これは第三者的なことではなくて、私自身にも向けられた言葉のようにも感じたのです。私など恥ずかしいことですが、『源氏物語』を現代語訳でもじっくりとは読んでおりません。読むといえるほどの読み方などしていないと思います。しかし、やはりその詩人のような方々が世界各地におられるのは間違いのないことですから、われわれも少しは心掛けて勉強しておかないといけないなと思ったときでした。

それからもう1つですが、1990年はペルーは大統領選挙の年でして、3月にリマに着いたときには日系二世の大学教授も立候補しています、という話を聞いたんですね。ですが、そのときは名前などはまったく聞かなかったのです。私のような外国人には何も見えてこなかったんです。ところが、フジモリ氏を推す勢力が、スペイン語では「*Cambio 90*」と言っていましたが、「変革の90年」という旗印を掲げて、その旗の下に結集して、一般大衆の希望の星フジモリ氏を大統領に押し上げたんですね。

「フジモリ」の「ジ」は、*ji* で書きますね。その [ジ] という子音が標準スペイン語にはないんです。ですから、皆さん最初は [フヒモリ] というような発音をしていました。しかし、だんだんと [フジモリ] と、日本語の子音に近い音が聞かれるようになって、ああペルーの人たちもこの音に慣れてきたな、と思うようになりました。

何と言ってもフジモリ大統領の最大の功績の1つは、それまでペルーを苦しめ悩ませ続けていたテロリスト集団 Sendero Luminoso (輝く道) の指導者を捕らえ、その集団を壊滅させたということにあると思うんです。例えば夜の9時ごろにドンという爆発音のような音がします。そうしますと、それはどこかリマ近郊で送電線がテロリスト集団によって爆破されたということなんですね。そうしますと、すぐに電灯がちらちらとなり、それから停電するんです。こうなると、手元に常備の懐中電灯を使ってとりあえず部屋の明かりを確保する、といったことをしていました。こんなことが、何年も続いていたんですね。

またこの種の破壊活動は、ペルー経済にとっても大きな負担となり、国家財政を疲弊さ



せる原因にもなっていたわけですね。ですから、そういうテロ集団を壊滅させたフジモリ大統領は、ペルーにとっての大功労者であったと言えると思います。しかし残念なことに、いまはご承知のように、大統領職にあったときの罪を問われて、リマで拘禁の身となっています。民衆の希望の星であったフジモリ氏が、このような形で失意の日々を送らざるをえなくなってしまったこと、それは予想もできなかったことですし、非常に残念なことと思うんです。このこともお話ししておきたいです。

最後ですが、ペルーのリマには、すでに1612年に、その名前をミゲル・デ・シルバ、これはスペイン語の名前なのですが、そういう名の日本人が渡ってきていたと、スペイン人で当時のペルー総督の遺言書のなかに記録が残っているんですね。だから、もうこの時代にペルーまで行っていた日本人がいたということです。この記録を読んで、どんな人だったのか、どんないわれがあってペルーまで行ったのか、と想像をめぐらせてみたこともありました。

## 外国人教員の定年規程

**進藤** ありがとうございます。いろいろこちらから先生にリクエストなどもいたしまして、いろいろなお話をさせていただいているわけですが、先生ご自身からも、こういうことはぜひとも語っておきたいということもおありではないでしょうか。それについてこの場でお願いしたいと思います。

**中岡** いくつかお話ししておきたいと思うことがありますので、2、3、お話しさせていただきます。

昭和51年3月16日に、外国人教官の定年に関する申合せが教授会で決定されました。それまでは日本人教員に関する定年規程のような規程は、外国人教官についてはなかったので、アルバレス先生は、定年制導入のことを知ってとても驚いておられました。アルバレス先生が昭和10年にこの大学の前身の大阪外国語学校に、文部省招聘の外国人教師として着任されたときには、契約には一切そういう条項はなかったと言っておられましたね。ですから、それを1つの拠りどころとしておられたわけで、ずっとこの大学で教鞭をとれると考えておられたと思うんです。

ただ幸いなことに、この外国人教官の定年規程には、施行時にすでに満65歳になっておられる先生方については5年の猶予期間があって、アルバレス先生にもこれが適用されることが分かっていたので、われわれとしては、まだこの猶予があるということで気持ちのうえでは少しは楽でした。

教授会で聞いたお話では、英語学科のグプタ先生、インド人の先生だったと思うのですが、グプタ先生は戦争で英米人の先生が皆おられなくなった後でも、一人で外国人としての英語の授業を担当されるなど、外大にとっての大功労者であったようです。ですから、このような功労のある先生方には、大学としてもこの際も特別な配慮が必要である、と学長先生が言っておられたのを覚えています。もちろんアルバレス先生も、このグプタ先生と同じように教育面に加えて、その他の面でもいろいろ日本のために尽くされてきた功労

者のお一人でありました。

アルバレス先生は、よく「私は教室で最期を迎えたい」とおっしゃっておられました。その教室というのは、おそらく、勝手な想像ですが、先生には大阪外国語大学イスパニア語学科の教室だったと思います。ですから、そのようなお気持ちでおられたのに、その大学が定年規程を設けたという事実を前にして、何か裏切られたようなお気持ちになられたのではなかったのか、と想像するのです。お寂しかったのでしょうかね。

それで、たまたま私は学科主任という立場にあったので、何度も先生のところに、先生こういうことなんです、というような説明にあがることができました。ある日、先生今日はお出講しておられるから、ちょっとご機嫌いかがですかとご挨拶してこようと思って行きましたら、「また何かあったか」と言われるんですね。そして、「このごろは君の顔を見ると、また何かあったのかとぎくっとする」とも言われたのです。そのときには私は言葉が出ませんでした。その日のことがつらい思い出として残っています。

## 語科誌

**進藤** 引き続き語科誌についてお話しいただけますでしょうか。

**中岡** イスパニア語学科の前身、西語部の時代には、語部内の同窓会誌として『西語部会誌』がありました。それは、いまのお話のように「語科誌」と呼ばれていたようですが、正式な名称は『西語部会誌』でした。

これは昭和4年の第1号から始まり、昭和16年の13号をもって終わっております。これを継承する形で昭和28年『Más y Menos』（マス・イ・メノス、「y」はスペイン語で「…と…」を意味する語です）という誌名のもとに、新しく語科誌が発行されることになりました。この『Más y Menos』というのは、かつてスペインにあった雑誌『+ o -』（「o」はスペイン語で「…または…」を意味する語です）にヒントを得られて、アルバレス先生が付けられた名称だと聞いております。そしてこの『Más y Menos』は昭和28年号を第14号、実質は第1号なんです、その前身となる会誌との継承、連続という意味で、語科誌第14号として発行されることになったわけです。これは昭和40年の第26号まで続くことになりました。

『Más y Menos』は先行の『西語部会誌』と同様にイスパニア語学科の同窓会誌ではあったのですが、在学生がその編集作業を担当して、先生方の指導のもと、年々の編集方針にしたがって、卒業生、教員、在学生から集めた原稿を中心に出来上がっていました。この会誌は同窓会誌とはいえ、語学科の動静についても詳しい記録を残しています。

例えば、昭和32年刊第17号は定年退官されたばかりで逝去された前学科主任の佐藤久平先生の追悼号になっており、本号は併せて、1920年代に約10年余にわたって初代外国人教授として教鞭をとられたミゲル・ピサロ先生の追悼号でもありました。当時の日本イスパニア学会の重鎮であられた永田寛定先生、笠井鎮夫先生、水谷清先生からの追悼の辞、それに学内では中国語学科の吉野美弥雄先生、ロシア語・フランス語学科のオレスト・ド・プレトネル先生からのお言葉も寄せられています。また卒業生からは、元スペイン大使の

林屋永吉氏（外国語学校第17回、昭和16年卒）をはじめ、多くの追悼文が寄せられています。言うまでもなく、イスパニア語学科の教員も追悼の言葉を捧げています。

この『Más y Menos』は同窓会誌であって、基本的には卒業生の会費によって発行されていました。したがって、イスパニア語学科の4年次の学生が、編集に加えて会費集めの仕事をもすることになっていました。このために、特に雑誌担当の諸君は卒業生の会社を訪ねて行って、来訪を受けた卒業生は、後輩にコーヒーをおごったり、お昼ご飯をご馳走したりするようなことにもなっていたようです。こうして先輩と個人的なつながりもできたということだったんですね。

この西語部の同窓会の総会は、毎年1回、外大の教室でおこなわれて、そこに卒業生が来られて、在學生に学生時代の思い出や、いまのお仕事のこと、そしてわれわれが非常に興味があったことですが、お仕事とスペイン語との関係、などを話されていました。もちろん在學生のわれわれは、こうした先輩のお話を興味津々で拝聴したものでした。

この総会のときに『Más y Menos』が配布されるということで、この雑誌は非常に重要な役割も果たしていたということなんです。しかし残念ながら、紛争の少し前に、この雑誌の存在や性格が学生側から批判されたのです。それで編集作業などを引き受けるように研究室から学生諸君に依頼すること自体が、もう難しくなっていました。西語部会の総会も途絶して、雑誌の発行も不可能になってしまったのです。このようなわけで、昭和20年代後半から30年代にわたって、イスパニア語学科の状況を記録してきたユニークな語科誌『Más y Menos』は昭和40年に廃刊になってしまっています。

その雑誌には、各年次の4年生の卒業論文の題目も掲載されていました。これは学生の立場からすれば、非常に興味あるデータですから、在學生の勉強のことをも十分に勘案したうえで、語学科内の状況をいろいろと記録した雑誌であった、と言えると思います。

なお、この雑誌の発刊に反対した当時の学生の言い分は、われわれが拠金してまでなぜ語科誌を出すのか、ということでしたね。ですから、こういった言葉が出てきますと、それに対していろいろと修正や説得を試みても、聞いてもらえなかっただろうと思います。当時の雰囲気からしましてもね。

なお、これらの語科誌については、吉田秀太郎先生が詳しい記録を残されています（『70年史』 pp. 385-386）。

**進藤** 昭和40年に廃刊ということは、学生運動のちょっと前ですね。

**中岡** そうですね。

**進藤** でも、大学ではもうそういう雰囲気になっていたのでしょうか。

**中岡** 残念ですが、そんな風潮も現れ始めていましたね。何か学生との話し合いの場で学科主任の國澤先生が、50人近くいた学生を前にして、「私は教室では君たちのお父さんの代わりだと思って、いまこんな話をしているんだ」とおっしゃったのですね。すると学生の1人が、「いや、私は先生を父に代わる存在とは思っておりません」と、ためらいもなく言いましたね。学生が皆そうだったとは言えませんが、残念ながらそんなぎすぎすした雰囲気が生まれ始めていたのでしょうか。國澤先生も憮然たる思いだったでしょうね。

**進藤** その雑誌が廃刊になった後はどうなりましたでしょうか。

**中岡** はい、この『Más y Menos』に代わって、昭和43年3月にイスパニア語学科研究室から専任教員の研究誌として『Estudios Hispánicos』が刊行されることになりました。第1号は國澤慶一先生退官記念号でした。この研究誌は年1回発行されて、平成21年で第33号を数えています。この『Estudios Hispánicos』にはこれまでの語科誌の精神が継承されている、と思っております。

### スペイン語学科の学生諸君へのメッセージ

**進藤** ありがとうございます。まだお話ししていただきたいことがたくさんあるのですが、先生への重要なお願いとして、今後のスペイン語学科の学生諸君へのメッセージを頂戴するということがありますので、よろしくお願ひしたいと思います。

**中岡** 長く時間を取りすぎまして申し訳ございません。スペイン語学科の学生諸君へのメッセージを、とおっしゃっていただきました。メッセージというのは、どうもおこがましいのですが、この話のまとめとして、少しだけお話をさせていただこうと思います。

言うまでもないことですが、外国語学部に通う学生の皆さんですから、まずなすべきは、教師であった者としての立場から言えば、それぞれの専攻語の習得であり、しかもオールラウンドなかなり高いレベルでのことばの習得、専攻語の習得でなければならないと思います。むしろ、「しゅうとく」というのは「習う」というだけではなく、それを「修める」という内容に高めていくような勉強の仕方が理想的なのではないか、と思っております。

だからと言って、批判的となりがちな外国語学校以来の伝統的な学習方法による学習も、その第一歩としては決しておろそかにしてはならないと思います。

それで、この修得と言いましょうか、あるいは到達点のレベルをどのように考えたらいいだろうかと、いつも自分に問いかけているのですが、私自身としては、まずネイティブ・スピーカーと不足なくコミュニケーションができること、これが1つと、もう1つは外国語の知識のある人から自分の専攻語について質問を受けたような場合に、相手を納得させられるような答えが即座にできるような、専攻語についての基本的な知識を有することではないか、と思います。これについては、いろいろご意見があるでしょうが……。

スペイン語をはじめ外国語学部の学生諸君は、もちろん外国に出て活躍する場合も多くなるだろうと思います。外国に出て、初めて自分の国の長所、短所が分かり、自分を見据えることができるとよく言われますが、同時に、自戒をもこめて言えば、自分がいかに自分の国のことを知らないかということをも認識させられます。外を学ぶにはまず内から始めよ、という逆説的な教えが語られますが、この教えのもつ重みをここで再度噛み締めておきたいと思っております。

ロマンス語の一つスペイン語を学ぶと決めたことは、「言葉は旧きを以て貴しとし、心は新しきを以て先とす」という、先人の教えを実践する、またとない場を得たことにもなるのではないのでしょうか。皆さんがいまいる恵まれた環境を活用し、その若き情熱を日々の学びに、また将来の研究に傾注されるようにと願っています。

これで頂戴していた時間になってしまいました。お話ししたことを振り返ってみますと、バランスのよろしくないことになったのではないのでしょうか。全体としては、あまり私事に及ばないようにと心掛けたつもりでおりますが、短期大学部、第二部については私の知識もとぼしく、また大学改革など外大全体の歩みについても断片的な記憶しかなかったもので、詳細については、恩師やかつての同僚の先生方にいろいろとお教えをいただいたり、改めて資料集を読みなおしたりして、私なりに整理をした箇所も多々ございます。ここで、いろいろとご教示いただきました方々に、深くお礼を申し上げます。もう1つですが、菅先生、進藤先生から、「研究について」も話をするようにとのご指示をいただいていたので、多少の準備はいたしました。しかし、こちらの時間の配分が悪く、教員としての大切な部分を割愛せざるをえなくなってしまいましたこと、本当に申し訳なくお詫びいたします。最後に、つたない話に貴重なお時間をお割きくださいました、菅先生と進藤先生に心からお礼を申し上げます。有難うございました。

(2010. 03. 31 受理)